# 漱石『こころ』の人名

Junko Higasa

漱石『こころ』は、「私」という一人称・「先生」という代名詞を使わない二人称・「K」という特定の三人称的表現で書かれている。そんな中で、状況描写上必要な「私」の母の名前や義弟の苗字等を除いて、唯一必要不可欠な固有名詞としての名前を持つのは、先生の妻「静」だけである。ここには乃木大将の妻「静」―現物写真には静（子）と添え書きされている―が伏線的に反映されているが、その同じ「静」という名前の中には時代による女性の生き方の相違も示唆されている。

男性に特定の名前を与えないのは、「社会的経済競争と恋愛」において、誰にでも起こり得る可能性を秘めた人間の性（さが）を、不特定多数の人に向けて書いているからである。一方、女性に関しては、社会的地位や経済などの背景を抱えた結婚の選択は、誰にでも起こり得る可能性を秘めた事象ではあるが、ここでは「静」という固有名詞を持たせたことによって、その意味は限定的となる。自分の意志ではなく望まれて乃木（結婚当時は歩兵第一連隊長）という陸軍軍人に嫁ぐという覚悟を携えた「静」の死と、厩のある邸から見て乃木大将と似た地位にあったと思われる陸軍軍人の家に育ちながら、ある程度自分の意志を含みつつ望まれて徴兵されない男に嫁ぐという平穏を携えた「静」の生である。そこには「先生」と「先生の妻」という「人間的に近くて性差において遠い心」と、「静」と「静」という「性差において近くて時代的に遠い心」がある。

ところで、独身時代の先生の妻（御嬢さん）の「こころ」は、どこにあったのか。

まず、自分の家に下宿した「先生」は、御嬢さんにとって、恋愛ではなく「結婚」を意識する最初の男性になった。そして K が下宿することになった。男性が二人になったことによって、否応ない比較の上において御嬢さんには「恋愛」という感情が生じた。そんな中 K と自分の親しさを気にする先生の嫉妬に気付く。しかし K に嫉妬の兆しはない。目に見える愛と見えない愛。少なくとも先生に好かれているという自覚はあっただろう。そして先生と K の学校があと 1 年、御嬢さんの卒業も間もなく来る順になった。その夏、先生は K と房州へ旅に出る。その旅から帰ったとき、御嬢さんの態度が K よりも先生に親切に見えた。この二人の留守中に奥さんと御嬢さんの間で結婚問題が話されたことだろう。先生は奥さんに自分の境遇と経済状態を話したが、K の環境は話しても経済問題は知らせていなかったので、経済が結婚の選択に結びついたかは不明である。しかし奥さんにとって少なくとも養家と実家が存在する K よりも、親を亡くし親類と縁を切った先生の方が婿としては望ましい。

旅から帰ったとき、御嬢さんの態度が「前と違い」K より先生を優先しているように見えたにもかかわらず、先生はなかなか結婚を申し込まない。御嬢さんは K の室で、ゆっくり歓談することに平気になった。御嬢さんの心は「恋愛」、K の心は「恋」。先生の心は信仰的な「愛」から「恋」へ移行したが、最後には純白な「愛」へ戻る。

先生が鎌倉で落とした曇った眼鏡は、「私」の手を経て鮮明になって返された。しかし妻に真実―〈夫の罪の原因が自分の恋にあったこと〉―を知らせてはならない。

『妻が己（おの）れの過去に対してもつ記憶を、なるべく純白に保存して置いて遣りたいのが私の唯一の希望なのですから』 いつものテーブルクロスと同じように。 (2020.6.19)